

關山禪師の生年説について

荻 須 純 道

一

關山禪師の生年説については、建治三年（一二七三）と永仁五年（一二九七）との二説がある。前者は漢興祖芳（一一七三—一八〇六）の樹下散稿と此山玄淵（一二七一—一七八三）の正法山六祖傳考彙に誌すところのものであり、後者は應禪普善（一二七三—一七四三）の關山國師別傳によるものである。前者の説は妙心寺に傳統的にあるもので、雪江宗深（一四〇八—一四八六）の撰する正法山六祖傳の妙心關山玄禪師の行狀によるもので、關山が延文五年（一二三六）十二月十二日、世壽八十四才を以て示寂したと誌されるから逆算して建治三年に生誕したとするものである。後者の説は雪江の正法山六祖傳に

年垂三十適值建長開山忌

とあることより推して永仁五年を以て生誕とし、示寂した延文五年は動かないから、世壽を六十四才としたのである。すなわち建長寺開山大覺禪師（蘭溪道隆）は、弘安元年（一二七八）七月二十四日に示寂したのであるから、もと關山が永仁五年に生誕したとするなら、大覺禪師の五十回忌法要が営まれた嘉暦二年（一二三二）は關山は年三十一

才の時ということになる。

この建長寺開山大覺禪師五十回忌法要のとき、宿忌の鐘を聞き威儀を整えて西來院に赴き諷經をしたが、同列の僧に問い「方今海内の叢林で誰か活手段の宗師たるや」といえば「我聞く洛の大燈國師惡辣の手段を具す。人を殺すに眼を眨せざる底の和尚なり」といわれ、その實狀をきき「これ我が眞の善知識なり」といい宿忌がまだ終らないのに西來塔下を去り京都に向つたといわれる。⁽¹⁾この法要の営まれた嘉暦二年には大燈の道風とみにあがつたときである。

もし關山の生誕が建治三年であるとするなら、大覺禪師五十回忌の法要が行われたときは、關山は五十一才ということになる。しかも大燈の道風をきいてただちに西來院を去り、露眠草宿、渴驂の泉に向うような思いで、晝夜を分たず京都に向つたのであるが、このような旺盛な求道心をもつ關山が五十一才までも未徹了であつたことは考えられないと阿部芳春氏は建治三年説（世壽八十四）に反對し、永仁五年説（世壽六十四）の妥當であることを主張している。⁽²⁾

關山國師別傳の永仁五年説をとつたのは、川上孤山氏の妙心寺史である。もつとも川上氏は永仁四年としているが世壽六十四才説を認めている。すなわち「法山六祖傳によれば大師の壽は八十四・法臘は六十四とある。けれども別傳に所謂大師の出世を永仁四年とすれば人壽正に六十四となる譯である。蓋し大師出世年月を高梨家系譜の様に建治三年とすれば八十四才となる。然し大師出家の年月その他から考證して見ると、六祖傳の法臘を以て人壽とするのが正鵠かと思はれる」としている。林岱雲氏の日本禪宗史に收められる「妙心寺開創付關山慧玄略傳」⁽³⁾も「別傳」に重きをおいて記述されている。

これに對して柴野恭堂氏は妙心寺六百年史に、世壽六十四歲説について論述し「別傳（駿河國蒲原龍雲寺の應禪座元の錄出にして、和泉國泉光寺の古溪座元が祖芳師に投與せるものを云ふ。樹下散稿所載）に依れば、大師の降誕は伏見天皇の永仁四年四月其母金色の頭陀來りて一枝の華を惠むと夢みて懷娠せしが、翌歲孟輒の人日に誕す、金光室に盈ち舉

家歎異せりと言ふ。即ち大師は永仁五年正月七日の出世となり、祖芳師の建治三年説に後くること二十年、而して示寂の延文五年十二月十二日には變りなきを以て、世壽六十四歳となるなり。今若し此の説に従ふとすれば、大師の大應に就て薙髮せられしは徳治二年即ち、大應建長に住するの年に相當し、其時大應より二十年の記削を受けたたりとして、爾後二十を経たる建長の開山五十年忌嘉暦二年は丁度大師の三十一歳の時となるが故に、六祖傳の『未_レ有_二啓發者_一年垂_三三十_一適值_二建長開山忌_一』諸山開祖傳の『年垂_三三十_一未_レ有_二啓發_一』本朝高僧傳の『無_レ所_二默化_一適值_二開山大覺忌_一』扶桑禪林僧實傳の『未_レ有_二人啓發_一而立之歲值_二建長開山忌_一』等の記述と殆んど合理的に一致するものと考へらる。又別傳に所謂嘉暦の初頃大師の老祖を夢見たることも、記削を受けてより二十年後なるが如くに記されてあり。故に大燈の聲譽を聞いて之に赴きたる事情等をも參酌して、大師の世壽を六十四歳と爲すを以て一應妥當なるかの如くに想はしむるものなきに非ず。然し——中略——其はすべて六祖傳の文意を誤り傳へたるに起因せる後世よりの想像に過ぎるべし』⁽⁴⁾としてゐる。そしてさらに「由來、雪江の『年垂_三三十_一』なる文字は大師傳に葛藤を生ずるの因となれり。即ち正法山六祖傳に於て『年垂_三三十_一適值_二建長開山忌_一』とあるは其の同じく『世壽八十四』と記す所と矛盾を生ずればなり。故に吾人は此の文を前句に續けて「未_レ有_二啓發者_一年垂_三三十_一」と讀むべく『適々』は『適來』の意味と見ずして『偶々』の意味に採るべし。雪江師此の誤り易き文字を傳へてより、扶桑禪林僧實傳及び諸山開祖傳は之を襲踏したるが故に、遂に大師の世壽に對する疑惑を産むに至りたり。また關山國師別傳に世壽六十四説と一致する記事ありて、益々後世の疑惑を深むるものあるなり。川上孤山師之れに迷ひ、近時阿部芳春氏の如きは極力六十四歳説を主張すれども茲には之れを採らず』⁽⁵⁾としてゐる。

ここで問題になるのは正法山六祖傳の「年垂三十^三適值^三建長開山忌^二」という記述である。もし建治三年（一二七二）説をとれば、關山の三十歳は徳治元年（一一三〇）であり、大燈はまだ大應につき修行中であり、建長寺開山蘭溪道隆の示寂したのは弘安元年（一二七八）であるから二十何回忌ということになって種々矛盾することになる。そこで紫野氏のいうように「未^レ有^三啓發者^一年垂三十^二」と讀めば一應關山傳は妥當となる如くである。すなわち關山が父とともに鎌倉に出て廣嚴和尚を拜して薙染したのは永仁五年の年二十一のときであると「考彙」は誌しているから、「年垂三十^三」は爾來三十年の歳月を経たとでもいうのであろうか。であるとすれば嘉暦二年（一一三二）の建長開山忌の營まれたときは、五十一歳であり、そして大燈に相看了したのもこの年である。しかし「年垂三十^二」の「年」は歳月であるか年齢であるか、この文だけでは明瞭でない。「八十四歳示寂」を考慮して讀まなければ、嘉暦二年が五十一歳であることを直ちに知ることは出来ない。祖芳の樹下散稿によれば、「年垂三十^二」は「當作五十^二」となし、天澤東胤錄⁽⁶⁾大徳覺印、和尚撰、を引用して次のように誌している。

天澤東胤錄、關山禪師傳系曰、大燈生^三于弘安五年^一、及^三二十三歳^一始往^三鎌倉^一見^三大應^一、二十六受^三其印可^一、辭回住^三靜京東雲居^一者二十年、四十五出^三世紫野大徳寺^一、五十六歳入滅。關山和尚生^三于建治三年^一、長^三大燈^一者六歳、北朝廷文五年入滅、壽八十四也。然則關山來^三參紫野一時在^三大燈出世之後^一。關山既五十餘歳矣。世曰^三年垂三十^一始謁^三大徳^一相^三見國師^一者非也。⁽⁷⁾

すなわち大燈の生誕は弘安五年（一二八二）であり、關山の出生は建治三年（一二七二）であるから、關山は大燈より五歳（文中六歳とあり）の年長者である。大燈が大徳寺に出世したのは五十五歳（嘉暦元年）であり、その翌年の嘉暦二年に關山は大燈に相見したのであるから、そのとき關山は五十一歳である。それで祖芳は關山が年三十に垂んとして始めて大徳寺で相見したとするのは非であるとしている。

一體、この「年垂三十一適値建長開山忌」という語句は寛永版の正法山六祖傳によつて見るのであるが、此山の「正法山六祖傳考彙」には

往相陽二拜廣嚴和尚二難染、己識宗門有佛祖大事因緣、而未啓發者、去其所或留其所、不復與時相待、年踰五十一適値建長開山忌、聞宿忘鐘、整威儀赴西來庵、飄經⁽⁸⁾

とあり、寛永版には「未啓發者、年垂三十」となっているが考彙には「未啓發者」の次に「去其所或留其所」、不復與時相待の語句があり、「年垂三十」は「年踰五十」となっている。この考彙は寛永版刊行以前の多少異なる教本の古寫本の冠註、傍註や別考等の諸書を會して編纂されたのがこの「正法山六祖傳考彙」である。この別考とは祖芳の撰する「六祖傳別考」であるが此山は同時代の學僧祖芳の六祖傳別考も参考したものと思われる。この考彙の標註略例に従えば、

舊版本文字或段節稍紕繆之處今據古寫本而校訂筆削、然其處處一一註列之、則却覺混淆是故止矣。⁽⁹⁾

とある。すなわち寛永版の本文や文字、段節等の誤謬あるところは、古寫本によつて校訂筆削したという。いまこの「年垂三十一」の字句を「年踰五十」と改めたのも古寫本によつて訂正したのであらう。

六祖傳の寛永版が刊行されたのは寛永十七年（一六四〇）であり妙心寺の行者能僊が刊行したものである。行者とは法衣帶刀を許され、寺門の經營に携わり、金錢出納に關與し妙心寺の造營を擔當した。そして妙心寺の年中行事や法要には殿司をつかさどつた。この行者の初代は赤澤能傳で南化玄興の俗弟子であつた。この赤澤家の能僊のとき、この六祖傳が刊行されたのである。祖芳の六祖傳別考によれば、

此ノ六祖傳今ノ板行ハ本山ノ行者能僊が寛永十七年印刻スル也。行者能僊也。此ノ印本所不宣所有リ。此印刻以前、慶長五年庚子古寫本今現ニ花園大雄院所藏ナリ。此ノ寫本宜所多シ。⁽¹⁰⁾

とあり、行者能僊が折角印刻したが、この寛永版は誤り多く不適宜な處がある。しかしこの印刻以前の古寫本に妙心寺塔頭の大雄院所藏のものがあり、この古寫本は慶長五年（一六〇〇）のもので信頼出来る旨を誌している。ところがこの「年垂三十」につき祖芳は「別考」に次のように述べている。

此印本在三十二不_レ宜、慶長五庚子之古寫本作五十一、爲_レ是關山祖在鎌倉凡三十年也、始參大燈五十一歲也、隨侍大燈四年也、關山祖勝大燈五歲也、雪江和尚關山傳與妙心寺記編、東陽和尚エ潤文ヲ被仰付ナリ。有禪林諸祖傳ト云書、甚珍書ナリ。其諸祖傳中ニ雪江和尚ノ草木ノマノ開山傳ト妙心寺記トヲ載ス、文ハ不花ナレドモ實錄ナレバ甚可也。水戸黃門公所藏有_ニ此書_一。會華園長興院有_ニ一人僧_一、後宗改_ニ槩門_一爲_ニ隱元侍者_一。隱元有_ニ侍者_一、一人謂_ニ唯了_一、一人謂_ニ唯龍_一、其唯了郎長興院之僧而改_ニ宗_一、示後還俗爲_ニ水戸公儒官_一謂_ニ佐々助三郎_一、爲_ニ花園盛徳院象泉和尚與_ニ助三郎_一舊識、故象泉和尚依之往_ニ常州_一閱_ニ水戸公藏書_一。即諸祖傳有_ニ藏書中_一、其傳中三十之三字作_ニ五_一。然五十寫誤也。此印本往々誤多矣。天澤東胤大德派下泉州堺禪樂寺二世德禪覺印義諦編集錄參見大燈時五十歲也。趣意

これによつてみれば、第一に慶長五年の古寫本に「五十」となっているから、關山は鎌倉に在ること凡そ三十年であり、始めて大燈に参じたのは五十一歳であり、大燈に随侍したのは四年であつた。しかも關山は大燈より五歳年長であつたこと。第二には雪江は關山傳と妙心寺記とを作り、門下の東陽英朝に潤文をさしたが、水戸黃門所藏であつた禪林諸祖傳に、雪江の草本のままの關山傳と妙心寺記があり、この書を妙心寺塔頭盛徳院の象先（泉は誤り）がかねてから舊識のある水戸の儒官佐々助三郎を通じてこの書を閲したところ「年垂三十」の「三」の字は「五」になつており五十の誤寫であることを象先によつて證せられたこと。第三には天澤東胤錄に關山が大燈に参見したのは五十歳であると記していること。

このような理由によつて祖芳は關山が始めて大燈に参見したのは五十一歳であることを強調し、寛永版正法山六祖傳

の誤りを指摘している。慶長五年の古寫本や、師蠻門下の象先の證言を以てしたり、また天澤東胤錄を参考して論述している。この象先はかつて師蠻が本朝高僧傳、延寶傳燈錄編纂のとき、師點とともに助力した門人である。師蠻が本朝高僧傳を撰述する頃は、寛永版の記述を否定するまでにはいたらず、疑問のまま「無所默化 適值開山大覺忌」とし年令の記述を避けたのであろう。しかし象先はのちに水戸にいたつて禪林の諸祖傳中に雪江の草本のままである關山傳や妙心寺記を見て、寛永版の非を指摘したものであろう。

三

さてこのように考えるとき、永仁五年生誕説、すなわち關山が世壽六十四歳を以て示寂したということは、全く考えられないことになる。「雪江が世壽八十四、法臘六十四、皆延文五年十二月十二日也」と誌しているにもかかわらず、後世このような疑惑を生じたのは寛永版の誤植によるもので、そこに二十年の誤差を生じた。佛教史家として知られる師蠻も本朝高僧傳においては漠然としているし、無著道忠も正法山誌には觸れていない。ただ祖芳と此山の二學匠のみが寛永版正法山六祖傳の誤謬を指摘し、その是正に力めている。しかも此山は考彙編纂にあつて祖芳の六祖傳別考を參考したらしいから、その先鞭をつけたものは祖芳である。尤も祖芳はかれよりやや先輩である應善普善の撰述した關山國師別傳に刺激されたのであろうと思われる。

應禪の關山國師別傳は祖芳の樹下散稿の中に收められているのであるが、應禪の關山國師別傳が雪江の正法山六祖傳と根本的に異なる記述は永仁五年の生誕としたことである。したがつて示寂した延文五年は動かないから世壽六十四歳ということになるが、雪江の記する「世壽八十四、法臘六十四、皆延文五年十二月十二日也」という記述と齟齬するから、世壽を記していない。これは恐らくさきに述べるように寛永版六祖傳が誤つて「年垂三十一 適值建長開山忌」と

したものをもそのままとつて逆算して生誕年次とし關山傳を記述したものであらう。しかも大應の建長入寺の徳治二年（一二三〇）や大覺五十年忌の嘉暦二年（一二三二）とか、また大燈から印可された元徳二年（一二三〇）も示寂年月と同じく動かないのであるから、凡て關山の年齢が二十年若くなつてくる。雪江の正法山六祖傳と應禪の關山國師別傳とを比較し主なる點をあげれば次の如くである。

（正法山六祖傳）

一、生年

永仁五年正月七日

永仁丙申四年四月其母夢、金色頭陀來惠一枝華、乃有娠、翌載孟轅人日誕、金色盈室、舉歎異。

二、生地竝に俗姓

信州人、俗姓源氏

信州更科人

高梨高家孫也。

俗姓源氏高家裔男也。

三、高梨家の信仰

師家世々植信種、其祖父嘗婦敬樵谷仙禪師、頗景奉祖道、故奉一子以入釋門、得度之後謂月谷忠禪師者是師伯父也、忠師參諸老末後謁大應始祖于筑之興徳、蚤卸角駄逮大應稟横岳請、舉補興徳、次視篆于興聖、師父新創廣嚴寺於鄉里、

四、得度

父携往_二相陽_一、登_二巨福山_一、拜_二廣嚴和尚_一、薙染。

迎_二忠師_一住_レ茲旦夕問_レ道、師廻七歲而秉_二童役_一、

師年十一、德治丁未鎌倉副元帥乞_二朝俸_一、大應祖住_二建長_一、月谷已聽_二個學_一切性_二鎌倉_一、欲_レ省_二大應老祖_一、父亦率_レ師偕_二月谷_一造_二鎌倉_一、師拜_二視老祖尊容_一肅然如_レ得_二舊物_一、孜孜擬_二欲得度_一、父亦有_二素志_一故不_レ拒許與。就_二月谷_一懇_二求薙染於老祖_一、祖問_二師志_一、父告以_二師平素_一、祖曰彼今_二渾_一處塵俗_一觀_二塵境_一恰如_レ見_二糞土_一因宣_レ號_二惠眼_一、稟授事就祖親摩頂曰、他時擁_二老僧後_一者爾乎、云授_二封紙一箇_一曰、却後二十年方好開折、

四、鎌倉での修行

稍長識_二宗門有_二佛祖大事因緣_一、而未_レ有_二啓發者_一

五、嘉暦二年大燈に参見する事情

年垂_二三十一_一適值_二建長開山忌_一、聞_二宿忌鐘_一整_二威儀_一、

赴_二西來院_一諷經、據_レ位立_レ班、師謂_二同列_一曰方今

月谷復親構_二一溪庵於巨福山中_一、爲_二老祖省觀所_一、時人呼謂_二廣嚴和尚_一、老僧順世後、師親_二炙月谷_一、物外、巨山、伯庵等同門間、積_二年序_一者二十年

嘉暦之初一夜夢_二大應老祖_一、祖切告_レ師曰、時緣已熱、豈可_レ爲_二偶爾_一、師夢中問_二所参底人_一、祖乃書_二

海内叢林誰爲活手段宗師乎。或者曰、我聞洛之大燈國師具惡辣手段、殺人不眨眼底和尚也、師問其實如何、曰、近日有一僧相着、展拜次一柄利刀自袖中落、其刃如冰雪、國師怒曰侍者托出這凶黨付與直歲於三門外速令棒殺、他後當爲佛法敵、直歲卽如慈旨矣。豈非惡辣宗師哉、師聞焉欣然而是我真善知識也、宿忌未終自西來塔下徑赴京師、

註 「年垂三十」は寛永版の誤りにつき「五十」と訂正する。

六、關字透過の時

一夕忽然會得雲門關字、急上万丈呈見解、國師拊手曰爾再來人也、爾初與老僧相看前夜夢雲門大師來、因是示以關字、爾今透徹速如此也、宣號關山、舊諱慧眼今改眼作玄則可、仍作頌而證之、

一偈曰、眼裡視雲霄、懸崖山萬仞、女兒脚慌忙、呼喚絕承順、師夢中誦旃竟而覺、師速疾起來書旃默論其意、師時登而立年、將祖翁授物、就天源折旃、中有偈、師感歎禮拜退、不曰有一僧、告師曰此間宗峰和尚於紫野開法、輒匡徒領衆宏唱南浦道、師聽如渴飲向泉、不分晝夜直過京師、

師一夕忽然會得所參底話、平日碍膈物一時撲落、急詣万丈呈所悟、峯曰上古榜樣別打一偈來師歸寮而急書一偈呈旃、旃曰、雲門關鎖太孤絕、萬仞懸崖撒手難、活路通無小語、看看大道是長安、峯歎曰、往昔六祖許可南岳曰、汝已如此、運用一器是故運庵祖師於天澤、老祖於橫岳先師授之際各自以古帆未掛話、復先師橫岳示山僧與爾示復爾、爾如今透徹如斯、宜號關山、改眼爲、

七、大燈印可

國師一日付_レ法語、其略曰、苟有_レ人則於_二壁立萬刃處_一輕輕推將去、到_二不_レ回頭時節_一直與_二惡辣手脚_一全體作用、不_レ必長養聖胎、專有_レ意憂_二於後昆_一者也、皆元德二稔仲夏上澣也。

八、妙心寺開創

赴_二京直謁_二華園離宮_一皇情大悅、先令_二中使_一謝_レ遠來、且約曰、朕將_レ捨_二離宮_一爲_二伽藍_一、當_レ請_二和尚_一作_二開山始祖_一、但願聽許、師對曰、貧道雖_二不敏_一、旣應_二宜詔_一得々而來、唯命也耳、天顏大喜、於是草_二創正法山妙心禪寺_一、降_二勅黃_一、請_二師開山_一、即日入寺開堂、師端_二居丈室_一接_二納四來_一、不_レ專_二威儀禮樂_一、唯棒喝交馳而已。

九、示寂

玄可歟、仍而賦_レ偈證_レ旃、

元德庚午師年三十有四而受_二記別_一、其略曰、古人得_レ旨後深隱堅韜、不_レ必長_二養虛廓聖胎_一專有_レ意憂_二後昆_一者也、

赴_二京兆_一卽詣_二龍峯毘耶室_一候_二間病痾_一、國師(大燈)擡頭曰、此間上皇之宏願杲曰麗_レ天——中略——先師指_二庵(安井稻光庵)後面(花園)_一、告_レ余曰、吾滅後三十年此地有_二老僧兒孫_一、恢_二張吾道_一去焉。復上人得度之際先師撫_二上人頂_一、曰、擁_二老僧後_一者爾歟、上人今記得也否、——中略——先詣_二龍翔祖師塔_一、次援_二肅_一謁_二離宮_一、上皇忻然、接約以_二宏願叡志_一、師肅然應_二聖旨_一、——中略——上皇預營_二微笑一庵_一迎_レ師、次創_二玉鳳院_一先遷_二玉座_一、漸次、雖_レ遷_二皇居於萩原_一敢爲_二臨幸所_一爾。于_レ時延元丙子。

師一日束裝頂笠召_二弱上人_一來也、相携到_二風水泉頭_一
 倚_二大樹下_一立_二談出世始末_一了泊然化去、授翁遽告_二
 一衆_一昇入_二丈室_一、奉_二全身_一瘞_二於本山艮隅_一、建_レ塔
 名_二微笑庵_一、世壽八十四、法臘六十四、嘗延文五年
 十二月十二日也。

四

このように應禪の關山國師別傳を雪江の正法山六祖傳と比較してみると、少なからず異つてゐるところが多い、生年が異つてゐるので、凡て二十年の開きがあることは、さきに述べたところであるが、雪江の六祖傳にも記されず、またこの六祖傳を考證して、註をしている祖芳の樹下散稿や此山の考彙にもない事柄が記述されている。

生誕地を更科としたのは別傳の説であるが、父を高家としたのは樹下散稿や考彙も同じである。生誕地に關しては別にこれを論じることにするが更科が生誕地であるとは思われない。また父を高家であることも問題が多い。高家の子である朝高が明徳三年（一三八九）一族所領の安堵を室町幕府に請願している所謂明徳注文の記によれば

一、水内郡和田郷并高岡等之事

一、高井郡吉田郷之事

件所者、延文二年十月二十三日、亡父永高之時拜領畢⁽¹³⁾

とあり、永高とは高家の法名であるとされるが、この朝高の父永高が延文二年（一三五七）に水内郡和田郷並に高岡や高井郡吉田郷を拜領したというから、關山が高家すなわち永高の子であるとするなら、關山の父高家は、少くとも關

山が示寂する三年前まで生存していたことになる。高家を父とすることは考え難い。

雪江の六祖傳には高梨家の禪宗歸依については、具體的には語っていない。しかし應禪の別傳には關山の祖父は樵谷惟僊（信州安樂寺）に歸依し、一子を出家さした。これすなわち月谷宗忠である。月谷はのち大應に師事し、大應が太宰府の崇福寺に移住したとき興徳寺を補し、また興聖寺に視察した。この月谷はのちまた信州に歸り廣嚴寺を創め、關山はその童役となつたと誌している。大應錄（卷下）の佛祖贊に「興聖月谷長老」と題し

頭髮鑿鬆雙眼青 全提一句得人憎

龜毛拂子未會動 凛々清風匝地生

という偈頌があるから、月谷は大應に師事した人であるが、一説には九州人ともいわれるから、果して月谷は關山の肉叔であるかどうかは一考を要するものと思われる。

また雪江の六祖傳には父にともなわれて鎌倉に行き、巨福山（建長寺）の廣嚴和尚を拜して薙染したと記しているのみであるが、應禪の別傳に大應に就いて得度し、惠眼と名づけられたことを記している。大應が徳治二年（一三〇七）幕府に迎えられ、鎌倉に下向して建長寺に住持したことは事實である。別傳は生年を永仁五年説を立てるのであるから關山はこのとき十一歳ということになる。關山は恐らく大應に相見したであろう。しかしこのときはじめて關山が得度したかどうかは疑問である。すでに廣嚴和尚につき得度し、このときこの大徳の大應につき戒を受けたのではないかと思われる。雪江より先輩の根外宗利が關山の遺誠に跋文を誌し

余憶之關山祖師者、非予孫受其祖印耳、應祖剃度門人而以遺意、倚龍寶國師。

としている。「祖考は樹下散稿に此亦傳聞之異説耳」としているが、根外は雲山宗峨の嗣であり、雲山は關山の俗縁の人といわれ關山のもとで修道したが許されず嗣法は授翁宗弼にした人で關山の遺誠を成文した人である。この跋文を根

外が誌したのは應永二十七年（一四二〇）で、恰も妙心寺が室町幕府に壓迫されて中絶した頃である。根外が關山や授翁から聞いたことを誌したと思われるが「應祖剃度の門人」とすることは少し作意があるのではないかと思われる。徳治二年大應が鎌倉に下向したとき、關山は大應に相見し、翌延慶元年（一三〇八）大應が示寂するまでそのもとで修道したと思われるが、得度はすでにしていたと思う。

應禪の別傳にこのことを強調するのは、この根外の遺誠跋文を根據としているのであろう。兎に角應禪は別傳において始終大應と結んでいる。大覺禪師五十回忌法要の營まれた嘉曆二年に關山は大燈に參見するのであるが、その記述は雪江の六祖傳とは異つてゐる夢に大應老祖が現われ「眼裡視雲霄、懸崖山萬仞、女兒脚慌忙、呼喚絕承順」との一偈を書いたといひ、天源塔にてかつて大應が授けた封紙を開けば夢中の物と符節を合すが如くであつたと記している。また關山が美濃伊深に韜晦するとき、勅使來つて先師大燈の遺命であるとして京都に上つたのであるが、別傳にはまず大燈を問竊し大燈との應對が記されている。大應が後宇多上皇に迎えられて京都安井の韜光庵にゐる頃、花園の地を指し大燈に「吾が滅後三十年にしてこの地に老僧の兒孫、道を恢張するであらうといつた。そしてまた大應は老僧の後を擁するものは關山か」といつたといひ、そして關山は龍翔寺（安井）の大應の祖塔を拜してのち、花園の離宮へゆき花園上皇に拜謁したように書かれたり、妙心寺の開創は延元元年（一三三六）丙子であると記している。大燈は翌年の延元二年（一三三七）に示寂したのであるが、大燈存命中に妙心寺が開創されたように記されている。

このようにして應禪の別傳は關山を大應と結ぶことに力を入れて記述され、ときには神秘的な表現をあえてしている。たとえば勅使が關山を探して伊深へゆくとき、茲家に占考を依頼し果して關山を探し出すことが出来たので、後日その易者のもとへ行き謝詞を述べた。そのとき易者のいうには、

先公來之前夜有_二一箇老僧_一、夢示_二委曲_一、僕問_二其名_一、答曰我是西京龍翔之僧、厥翌旦龍翔知事尋_二僕茅舍_一來。低聲

告_レ僕曰、我寺開祖之像抵_二今日_一、隱然不_レ見、將爲_二賊乎_一、將爲_二遊化_一歟。僕卽察_二夢事_一答曰、是遊化也、當_二期_二四五日_一還來、他日知事復來謝_レ僕曰、占者甚奇、其像還來、瞭然如_レ本矣⁽⁹⁾

といったようなことを記している。しかし、別傳には雪江の六祖傳に記されていない信仰心の篤かつた高梨家のことや、大應國師をはじめ月谷、物外、巨山、伯庵等の諸老宿に參禪したことなどはともかくとして、大應が二十年後の識記を與えたり、關山の投機の偈「雲門關鎖太孤絕、萬仞懸崖撒_レ手難、活路通處無_二小語_一」、看看大道是長安」、や花園上皇から詩章を賜つたことなど、他の書に誌されていないことが記述されている。

應禪の關山國師別傳には、素朴な關山傳を補うことが出来るような記述はされているが、出據を示していないから信憑性がない。祖芳はこの別傳を樹下散稿の中に收め、次のような識語を末尾に誌している。

關山國師別傳、泉州泉州寺古溪（宗符）座元投_レ芳來、今寫_レ之。駿州蒲原龍雲寺應禪座元所_二錄出_一也。芳按件々所_レ記不_レ知_レ據_二何古記_一、全不_レ載_二出據_一。古云、言不_レ涉_二典章_一非_二君子所談_一。若不_レ涉_二典章_一則總是無稽之言、不_レ足_レ取。雖_レ然正法山六祖傳等不_レ載之事、皆未聞之談。是故寫留_レ之云。

祖芳識⁽¹⁰⁾

このような關山國師別傳を論據として妙心寺史が著述されて以來關山の世壽六十四歲説を主張する著述がいで、恰も世壽八十四歲説は妙心寺の傳承に過ぎないかのような印象さえ與えてきた。禪宗編年史の著者白石芳留氏も「從來、關山の世壽に（正法山誌、高梨系譜）及び梅峯元元の八十四歲説と（關山別傳）の六十四歲説の二あり。若し前者を採らば這の俊傑關山にして五十歳まで未徹たりしが如く、且つ關山十一歳剃度の時（弘安十年と爲る故）其師大燈は僅に六歳、又南浦は鎌倉に在らず、太宰府崇福寺に住し、其より十八年後に奉詔入洛せしは事實也、故に關山を永仁五年生れとし、大燈より十五歳齡少く、世壽六十四歲説を允當なりとすべきか」と論考するにいたつた。

しかしこれは上來述べてきたように、永仁五年生誕（世壽六十四歳）説を立てる應禪の關山國師別傳なるものが信憑性乏しく、江戸初期に書かれたものであり、もし雪江の正法山六祖傳と異ることを誌すなら出據を示して論述すべきであること。そして疑惑を生じた問題點の「年垂三十」適值「建長開山忌」は寛永版法山六祖傳の誤りで、祖芳の六祖傳別考によれば祖芳の頃には現在した妙心寺塔頭大雄院に所藏された慶長五年の古寫本には「三十」は「五十」となっていること。このような理由によつて關山は、嘉暦二年、五十一歳のとき古今稀れにみる英靈漢大燈に參禪する因縁が熟したものであり雪江の六祖傳に記するように關山は延文五年、世壽八十四歳を以て示寂し、建治三年を以て關山の生誕した年次とすべきであると思われる。

註

- (1) 正法山六祖傳 妙心關山玄禪師の章
- (2) 信濃名僧略傳集（阿部芳春著）六十六頁參照
- (3) 日本禪宗史（林岱雲著）六〇四頁
- (4) 妙心寺六百年史（天岫接三編）七二頁
- (5) 同上 五三頁
- (6) 法山六傳考彙 妙心關山玄禪師の章（寫本）
- (7) 樹下散稿（漢興祖芳撰）（寫本）
- (8) 法山六傳考彙（此山玄淵撰）妙心關山玄禪師の章
- (9) 同上 標註略例
- (10) 祖芳首座の著で内題は「法山六祖傳考」となっている。寫本
- (11) 法山六傳考彙 標註略例
- (12) 六祖傳別考
- (13) 同上
- (14) 本朝高僧傳卷二九、京兆正法山妙心寺沙門慧玄傳
- (15) 信濃史料卷七、明德三年三月の條
- (16) 正法山誌卷四
- (17) 禪學研究四六號拙稿關山慧玄禪師遺誡について
- (18) 關山國師別傳（樹下散稿所收）
- (19) 樹下散稿
- (20) 禪宗編年史三〇〇頁